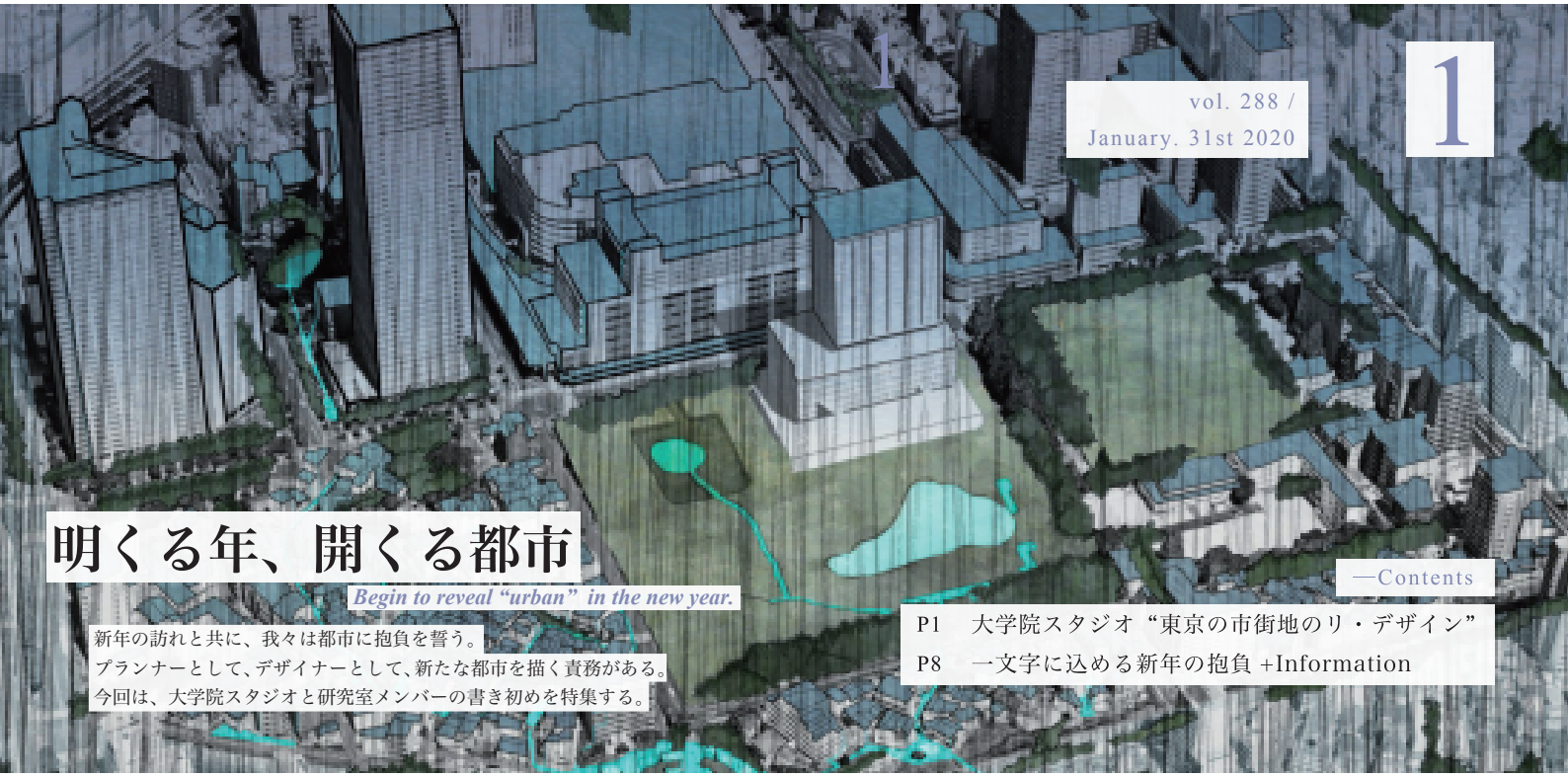
UrbanDesignLab.Magazine
都市デザイン研究室マガジン
vol. 288 /
January. 31st 2020
1



明くる年、開くる都市

Begin to reveal "urban" in the new year.

新年の訪れと共に、我々は都市に抱負を誓う。
プランナーとして、デザイナーとして、新たな都市を描く責務がある。
今回は、大学院スタジオと研究室メンバーの書き初めを特集する。

—Contents

P1　大学院スタジオ "東京の市街地のリ・デザイン"
P8　一文字に込める新年の抱負 +Information

text_NISHINO / M1

大学院スタジオ " 東京の既成市街地のリ・デザイン "

Graduate School Studio. The Theme is "Re-design of Tokyo City Area."

都市工学専攻の修士生にとって肝となる授業の一つが大学院スタジオである。S セメスターでは被災地や災害による大きな被害が懸念される地域を対象とした「復興デザインスタジオ」が行われたが、A セメスターのスタジオは東京都内を対象として行われる。

スタジオ演習は以前は継続して行われていたものの、しばらく開講されておらず、2017 年に復活する形となった。テーマ / 対象地が 3 種類用意され、学生は 1 つを選択する。過去 3 年間の対象地は以下の通りである。本年度は本校近くのエリアである本郷が根津を加えて、引き続き対象地となった。そして東京の玄関と位置付けられ、スマートシティ化のすすむ品川。公園整備と再開発が行われ、造幣局跡地の開発も進行中の東池袋が新たに対象地として選定された。

また本スタジオには都市工学専攻の都市計画コース以外の学生も複数参加している。加えて留学生の参加数も比較的多い。先生からのレクチャーや、ジュリーでの発表は全て英語で行われる。学部の演習に比べ、リサーチや提案の幅が大きく広がる中で、英語でのディスカッション、資料作成、プレゼンテーションといった能力も問われることとなる。

最終ジュリーは 2019 年 12 月 26 日に行われ、講評には都市工学専攻の先生のみならず、現地で実際にまちづくり活動をされている方や再開発に携わる企業の方々が訪れ、熱い議論が交わされた。

次項からは各班の提案概要を紹介していく。なお、スタジオには都市デザイン研究室からは宗野が本郷 / 根津班、應武・砂川・沼田・繆 が東池袋班に参加している。彼らのコメントや先生方の講評も併せてご覧いただきたい。

▲最終ジュリーの様子

2017 年		
本郷	高島平	西東京
2018 年		
本郷	横須賀	西東京
2019 年		
本郷 / 根津	品川	東池袋

▲3 年間のスタジオ対象地

	都市計画コース（都市工学専攻）	他専攻
本郷 / 根津 班	都市デザイン研（M1）2 名 都市計画研（M1）1 名 まちづくり研（M1）2 名	
品川 班	都市計画研（M1）3 名	公共政策大学院（M2）1 名 *留学生
東池袋 班	都市デザイン研（M1）4 名 *1 名留学生	都市環境コース（M1）1 名 *留学生 建築学専攻（M1）1 名

▲スタジオ参加者の専攻

本郷・根津 － *Place Design with Histrical Heritage*

＜課題要旨＞
本郷・根津地区には、歴史的建築物をはじめ、老舗の商業蓄積、坂や路地などの特徴的な地形・基盤といった歴史文化資源が多く存在する。一方、木造密集市街地の存在による防災面での課題や、新規住民流入に対して既存居住者の高齢化によるコミュニティバランスの崩れといった課題も見られる。「歴史文化資源」や「場所の価値」を理解し、これらの課題解決に寄するプレイスベーストなアーバンデザイン、プランニング、制度の提案を求める。

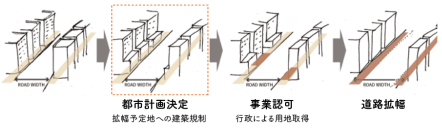
本郷通り拡幅解除に向けた空き資源の暫定活用と小規模個別更新の提案

寄稿：まちづくり研究室 M1 村田　編集：西野

対象地

▲対象敷地

提案対象地は、東京都文京区の本郷通りに面する。本郷通りは道路拡幅事業が都市計画決定されているが、未だ着手されておらず、拡幅予定地には強い建築規制がかけられている。



▲都市計画道路拡幅プロセス

しかし本郷は開発圧力の強い地域であり、今すぐに拡幅計画が解除されると、まちの様子を大きく変貌させる恐れがあるため、「本郷らしさ」を受け継いだ更新が求められる。

リサーチ

①開発可能性

登記簿謄本を用いて、土地所有と不動産の動きを調査。土地建物の更新が滞っている敷地も多く、拡幅計画が解除された際のインパクトが大きいと考えられる。

▲開発可能性別分類図

- 相続・売買から 30 年以上経過
  →近いうちに土地所有者の更新が起こる可能性
- 土地所有者の居住地が文京区外
  →マンションが建設される可能性（※敷地内のマンション建設は文京区外在住者の土地で起こる傾向）
- 旧耐震時に建設されたマンション
  →近いうちに建て替えの可能性

②インバウンドの増加

東大への留学生や訪日外国人観光客の数が増加、地域関係者が多様化すると考えた。

③ファサードの変化

卒業論文で描かれた 1971 年の沿道ファサードの様子と、現在のものを比較。古くから残る建物や専門的な古書店の存在が確認できた一方、外観や機能の変化や空き店舗の増加も多く見られた。

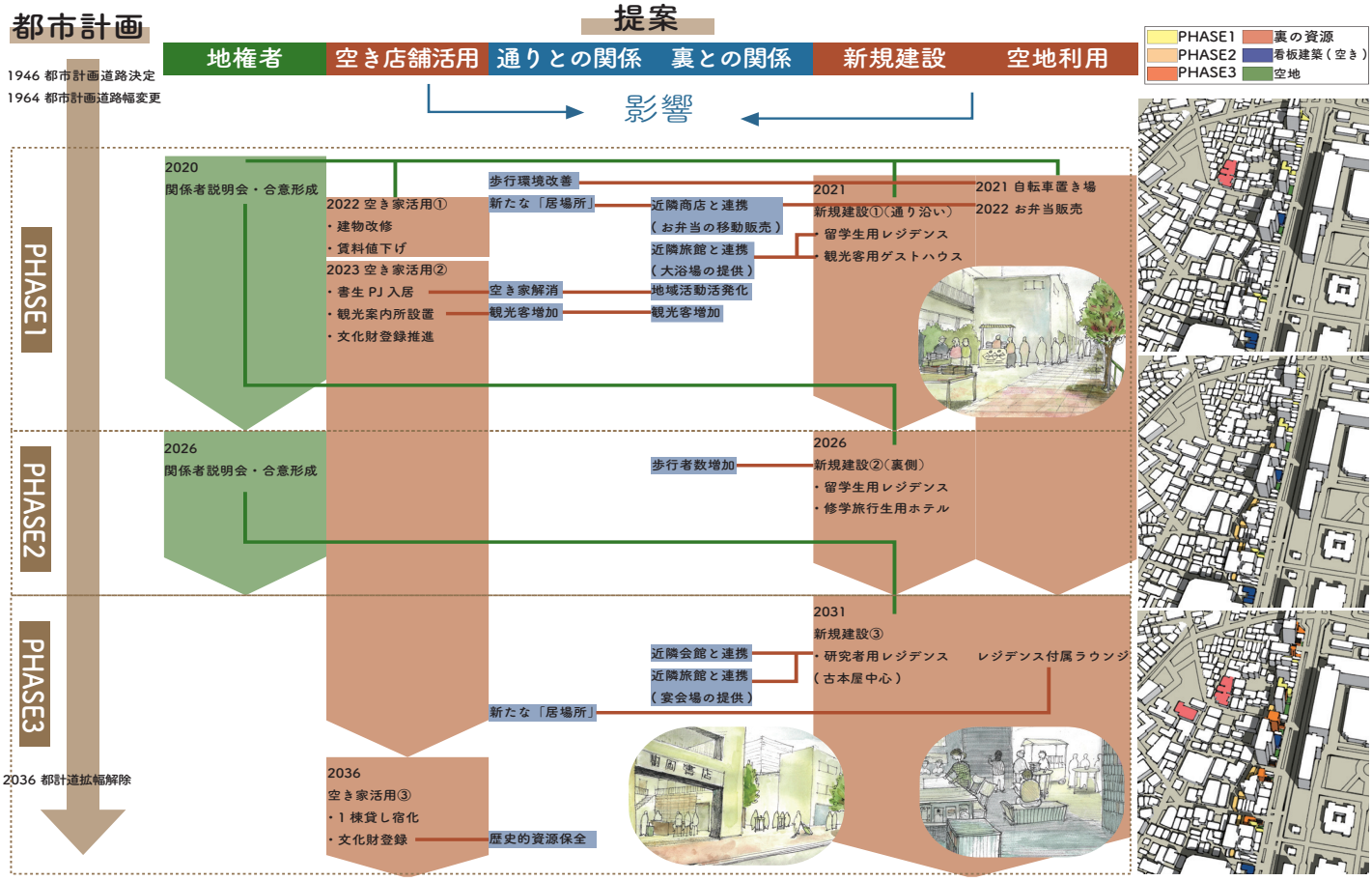
▲ 1971 年と 2019 年のファサード変化

④宿泊施設の減少

かつて本郷では東大生や修学旅行生の受け入れ先として、多くの下宿や旅館を有し、新しい人を受け入れる土壌が備わっていた。しかし時代の変化と共にそれらが激減しており、付近の宿泊施設が不足していることがわかった。

コンセプト & 提案

「本郷のエントランス」をコンセプトとして、東大から本郷のまちへ滲み出すような通りのあり方を提案した。拡幅計画が次々回の見直し時（2036 年）に解除されると仮定し、そのインパクトの抑制と、地域文脈を受け継ぎつつ、ストリートに賑わいを生み出していくようなシナリオを提示した。

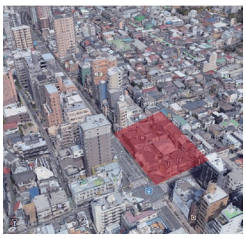


▲提案したシナリオ

根津らしさを継承した、マンション開発に対するオルタナティブの提案

寄稿：都市デザイン研究室 M1 宗野

対象地の調査と分析

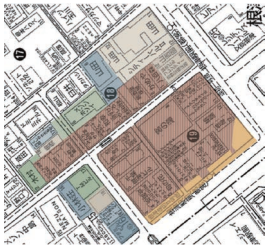


▲対象地周辺の航空写真
(Google Earth より引用)

▲対象敷地内の飲食店

提案対象地は、東京都文京区、根津一丁目交差点の一角である。開発圧力が高く、周辺でマンション開発が進む中、この一角では未だ大規模な開発が行われず、低層の建物が建ち並んでいる。

幅員の小さな路地に間口の細やかな店舗が建ち並ぶなど、小さな単位で構成された空間と、植木鉢をはじめとした住民の生活のにじみ出しがつくる風景が特徴的である。気候の良い時期には、店先や住宅の玄関前で立ち話をする様子が頻繁に見られる。



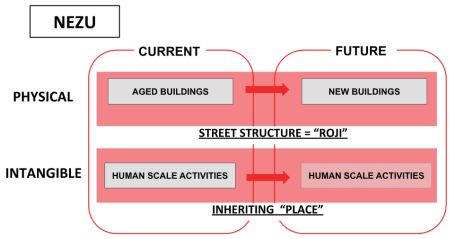
▲土地所有者の調査結果
所有者ごとに色分けをしている

登記簿謄本を用いた調査により、対象地では１人がまとまった土地を所有していることがわかった。この一角は、土地所有者の「根津らしさを守りたい」という思いによって大規模な開発を免れてきたのである。

しかし、土地所有者から、建物が低層で床面積が小さいために、賃料と固定資産税が釣り合わずに困っているというお話を伺った。持続的に「根津らしさ」を守っていくためには、ある程度の事業性が担保されていることが必要なのである。

コンセプト

そこで、対象地において、「根津らしさ」を継承しつつ事業性を担保する建て替え案を提案することにした。「根津らしさ」とは、建物自体に起因するのではなく、小さな単位からなる空間構成と、そこににじみ出す人々の活動にあると考えた。以下では、提案内容を①設計、②事業スキームに分けて説明する。



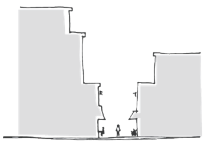
▲コンセプト

提案 - ①設計

▲路地の引き込み

設計において重視したことは、ある程度の建物ボリュームを確保しつつ、対象地周辺の路地空間を引き込み、さらに引き込んだ路地空間において人々の活動を誘発するようなしかけをつくることである。以下の５つのデザインコードを用いて設計を行った。

デザインコード (1)
小さな間口の連続による町並みのリズムを継承すること



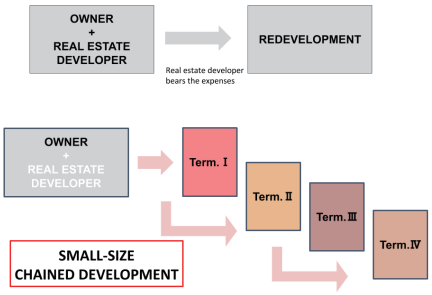
デザインコード (2)
歩行者の視点から見た低層な町並みを継承すること

デザインコード (3)
店舗の主要な入り口を路地側に向けること

デザインコード (4)
路地に面して縁側空間を設けること

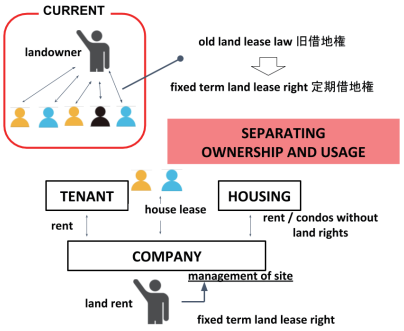
デザインコード (5)
構造を見せつつヴォイドを設けて小さなスケールを保ちつつ空間の風通しをよくすること

提案 - ②事業スキーム



▲段階的な建て替えスキーム

対象敷地を４つに分け、段階的な建て替えを行うことを提案する。その理由は３つある。１つ目に、対象地を漸進的に変化させることにより、新築建物を周辺となじませるため、２つ目に、１回にかかる建設費を抑えて負担を分割するため、３つ目に、建て替えのつど社会的な状況の変化を踏まえてプランの見直しを可能にするためである。



▲土地の管理・運営システム

さらに、対象地における土地の管理・運営システムを提案する。現状、旧借地法により土地に対する借地人の権限が大きく、対象地全体をトータルに計画することが難しい状況である。そこで、土地を一括で管理するまちづくり会社の設立を提案する。まちづくり会社が土地所有者から一括、定期借地で土地を借り受け、そこが各テナントや住居にスペースを貸し付ける。敷地全体をマネジメントし、設計提案、事業スキーム提案全体の実現性が高まると考える。

まとめ

強い開発圧力にさらされる対象地域において、「根津らしさ」を継承し発展させるために、設計、事業スキームの両面から、一般的なマンション開発に対するオルタナティブの提案を行った。

都市計画研究室 M1 松村優

当事者として向き合う

登記簿謄本の読み解き・建て替えシナリオの設定など、今までよりも実現可能性に踏み込んで提案を行ったのが、新鮮でありつつも知識の足りなさを痛感した部分でもあった。反省として、本郷通り沿いの建物形態を資源と捉えたからには、それを守るような制度提案も盛り込めれば良かった。スタジオが進むにつれ、本郷通りがそれまでとは全く違う見え方をしてきたのが印象的だった。自分自身も街における当事者である、一番身近な街に正面から向き合えた良い経験だったと思う。

都市計画研究室 M1 宗野みなみ

顔の見える提案

今回のスタジオでは、土地所有者や対象地周辺でまちづくりの活動をしている方々にご協力いただき、関係者の顔が見える状況で提案を検討した。人それぞれの思いに触れ、夢を描くことと実現性のバランスをとるために考慮すべき視点のあまりの多さに、迷うことも多かった。最終的にまとめきれたかは怪しいが、非常に勉強になった。土地所有者や周辺住民に対してプレゼンをする機会をいただいたので、提案をブラッシュアップしていきたい。

講評｜都市デザイン研究室 准教授　中島直人 先生

制度と空間の往還を

根津と本郷で、地域固有の歴史文化が感じられる空間や生業の継承を基調とした都市更新のありかたを提案した。根津では事業を進める土地所有者の立場から（見よう見まねではあったものの）分割型の事業計画を立て、グランドレベルでの空間のつくりこみに拘った提案を行った。本郷では、都市計画道路の指定解除に向けたプログラムと解除後の都市像を提案した。ともに、単純な空間デザインということではなく、土地に関する現実的な制度的制約をよく理解した上でのプロセス・デザインに果敢に挑戦したことを高く評価したい。ただし、制度→空間という方向性については検討されていたが、空間→制度というフィードバックにまでは思考が及ばなかった点は、一つ反省点かも知れない。根津の身の丈型再開発が特殊ケースではなく、普通の選択肢ととなるために必要な制度的改革、本郷での都市計画道路解除後のガイドライン策定あるいは地区計画指定との連動なども提案できると、制度と空間を柔軟に往還する、都市工大学院ならではの都市デザイン提案となったように思う。

品川 – *Urban Systems Design to the New Gateway of Tokyo*

＜課題要旨＞
都市システムのデザインは、従来の都市計画・都市デザインと持続可能な目標を実現するスマート技術を融合させた新たな手法である。品川駅を中心とするエリアは高輪ゲートウェイ駅及びリニア新幹線駅の開業により大きく位置付けが変わることが予測され、高い開発ポテンシャルを有する。このエリアにおいて現行の法制度と将来変化の双方を踏まえ、新たな都市システムをデザインする枠組みの提案を求める。

シナリオ選択による品川の低未利用地のスマートシティ開発計画の提案

寄稿：都市計画研究室 M1 藤江　編集：西野

スタジオの位置付け

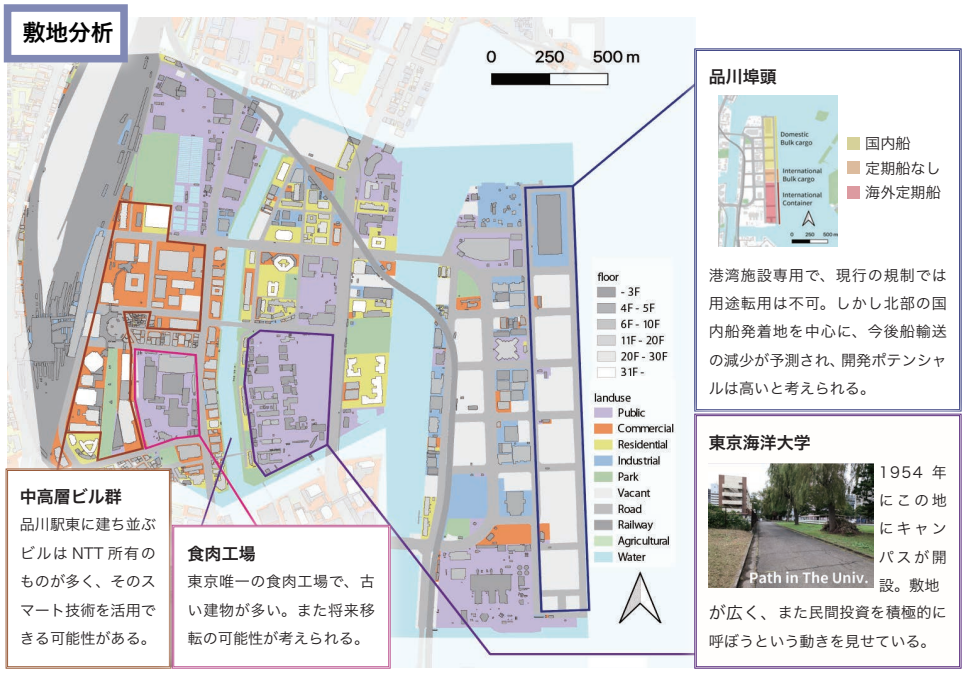
本スタジオは、2019 年 6 月に行われた品川スマートシティパイロットというワークショップの提案コンセプトを受け、より具体的な開発計画や公共政策の提案を行うというものであった。またここで提案した計画に基づいてジョージア工科大学のスタジオにて解析及びモデル化が行われ、また国立環境研究所が計画の環境シミュレーションを行う予定となっている。様々な主体と協働するプロジェクトとしてこのスタジオが位置付けられた。

対象地の調査

提案の対象地は、品川駅の東に位置するエリアである。羽田空港へのアクセス駅かつリニア始発駅である品川駅、そして 2020 年 3 月に開業予定の高輪ゲートウェイ駅から程近い距離にある地区として高い開発ポテンシャルを有しながらも、低未利用な公共用地が多い現状である。

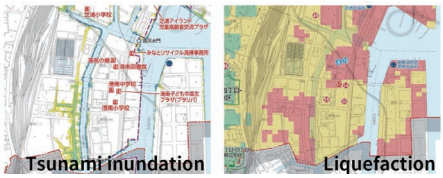
品川駅周辺には商業用地が集中し、高層のオフィスビルも多く見られる。また運河沿いでは住宅用地の増加が確認できた。一方、食肉市場や東京海洋大学と言った公共用地では容積の充填率が低く、今後開発の可能性が示唆される。

敷地分析



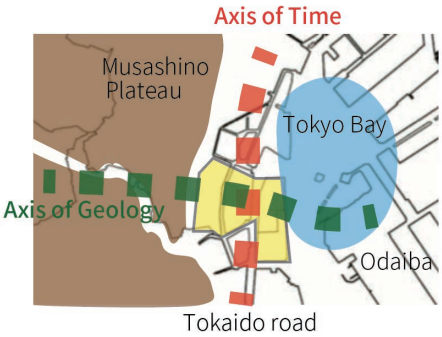
災害リスク

津波リスクは低いものの、液状化リスクが高く、災害時のインフラ破損と言った被害が想定される。



▲港区ハザードマップ

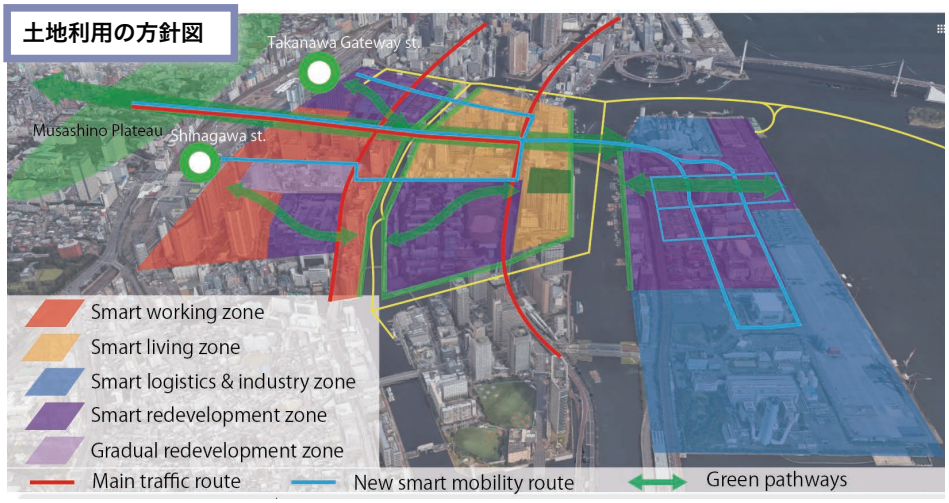
全体計画



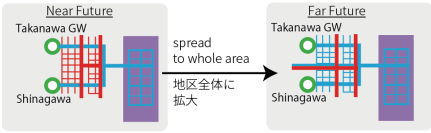
コンセプト①「新たな東京の玄関」
・時間の軸：東海道の通り道だった事による宿場町としてのコンテクスト、そして羽田空港へのアクセスとリニア始発駅という現代の要素。新旧が交わるエリアとして捉えた。
・地勢の軸：武蔵野台地と東京湾に挟まれ、また羽田空港へのアクセス点でもある。陸と海と空を繋ぐエリアとして捉えた。

コンセプト②「公正、レジリエンス、環境」
スマートシティ全般に求められる要素として、これら 3 つを計画に取り入れた。

土地利用の方針図



ワークショップを踏まえ、我々の設定したコンセプトから土地利用の方針を検討した。新たに開発する敷地として 4 つ（上図の紫）を設定し、残りを既存の土地利用を踏まえて労働、居住、工業のエリアとした。運河沿いの遊歩道は緑道とし、誰でも享受できる緑のネットワークの骨格を構築した。既存の道路ネットワークの中に、品川駅と高輪ゲートウェイ駅から各エリアを結ぶようにスマートモビリティ専用道路を挿入した。スマートモビリティ専用道路はまず品川埠頭エリアを中心にネットワークを構築し、将来的にはエリア全体に展開していく構想を立てた。

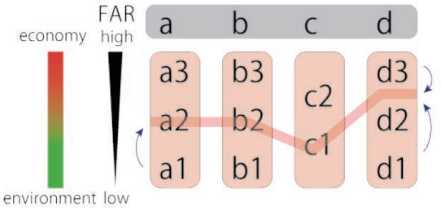


▲スマートモビリティ専用道路の展開

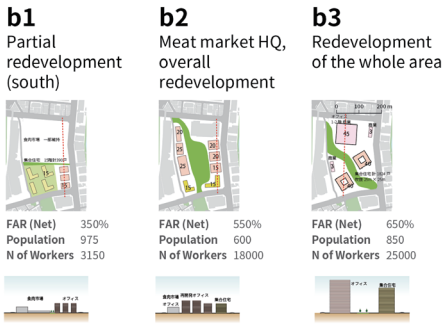
敷地ごとの提案

提案対象とした４つの敷地においてそれぞれ２～３つの開発計画オプションを作成した。それぞれの計画では空間配置や用途、容積率、想定人口、想定就労者数を大きく変えている。

計 54 パターンの計画に対して国立環境研究所が環境シミュレーションを行う予定となっているが、本スタジオでは各敷地、１つずつ開発計画オプションを選択し、全体の提案とした。その際、経済と環境のトレードオフを念頭に、地区全体のバランスを考えて選定した。また、選択しなかったオプションについても、そこで検討したことを選択したオプションへ反映するという形をとった。

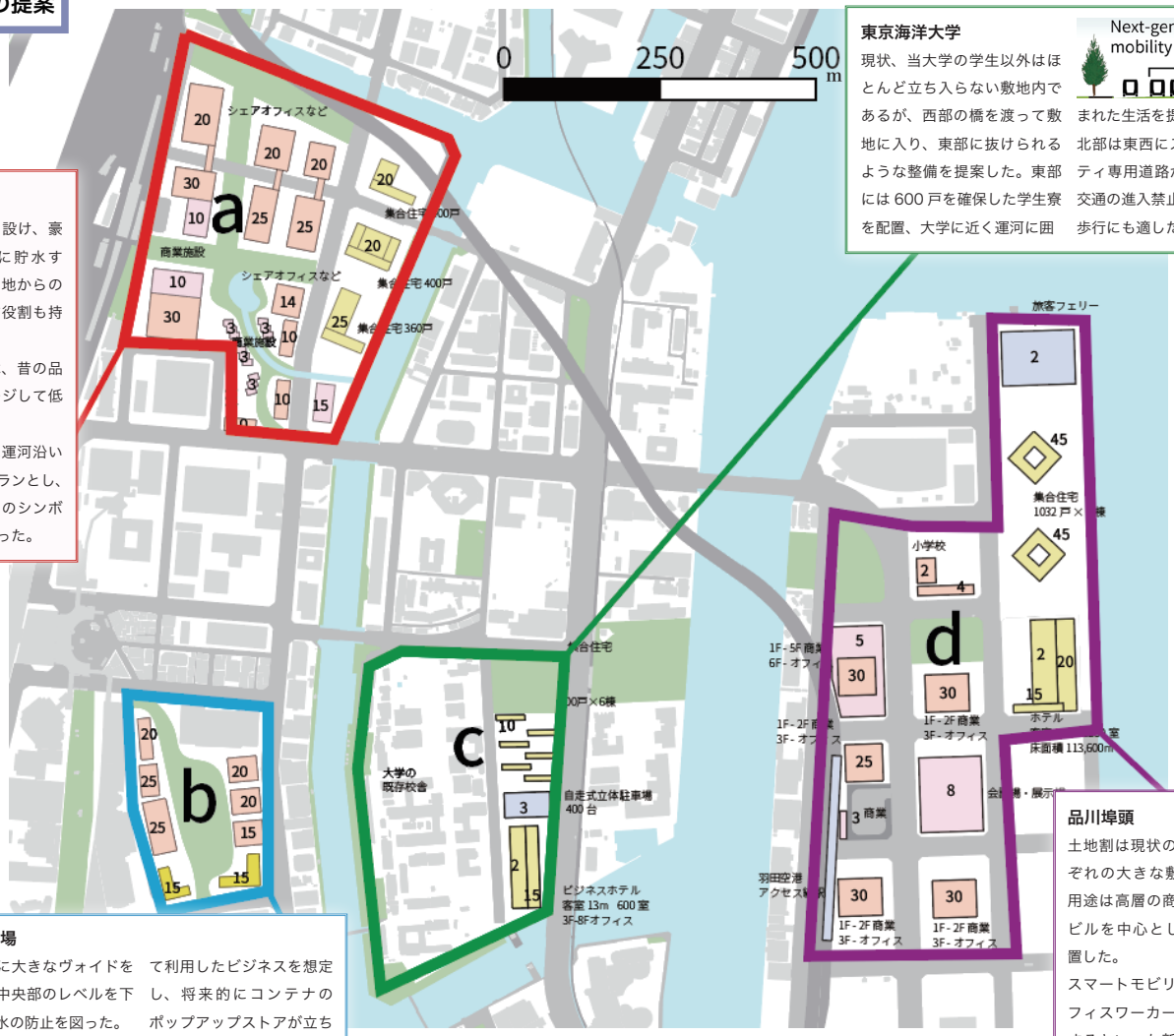


▲開発計画オプションの選択

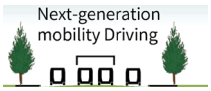


▲複数の開発計画オプション（敷地 b の場合）

各敷地の提案



東京海洋大学



現状、当大学の学生以外はほとんど立ち入らない敷地内であるが、西部の橋を渡って敷地に入り、東部に抜けられるような整備を提案した。東部には 600 戸を確保した学生寮を配置、大学に近く運河に囲まれた生活を提供する。北部は東西にスマートモビリティ専用道路が走り、自動車交通の進入禁止と緑化により、歩行にも適した空間とした。

水処理場

敷地内に調整池を設け、豪雨時には一時的に貯水する。また武蔵野台地からの水を東京湾へ流す役割も持たせた。
南部の商業施設は、昔の品川エリアをイメージして低層の木造とした。
東部の集合住宅は運河沿いの低層部のレストランとし、運河をこのエリアのシンボルとして再生を図った。

食肉工場

建物間に大きなヴォイドを設け、中央部のレベルを下げて洪水の防止を図った。またこのエリアで使用されていたコンテナを商店として利用したビジネスを想定し、将来的にコンテナのポップアップストアが立ち並ぶようなビジョンを描いた。

品川埠頭

土地割は現状のものを継承。それぞれの大きな敷地を活用すべく、用途は高層の商業 / オフィス複合ビルを中心とし、MICE 施設も設置した。
スマートモビリティを利用してオフィスワーカー向けに商品を運搬するといった新しいビジネスも構想した。

都市計画研究室 M1　藤江教貴

新たなプランニングの形

シミュレーションの専門家や海外の都市デザイナーと協働したスタジオはとても新鮮な経験だった一方、彼らの要求に答えつつ提案を行うことは容易ではなかった。スマートシティと言っても、環境保護の他、レジリエンスや社会的な公正など要求される要素は多く、また品川というエリアの潜在性の高さも加味してオプションを複数作成することにはかなりの労力を要した。不測の事態もあったが、東大チームならではの提案ができたと思う。非常に達成感のあるスタジオだった。

都市計画研究室 M1　西井成志

"スマート"なプロセス

「スマートなプランニングとは何か？」という問いから始まったこのスタジオでは、最終的なアウトプットのみならず、そこに至る過程でもスマートさを意識した。例えば、建物配置案についてシミュレーションによる環境評価を行い、意思決定に生かすという具合だ。演習を通じて環境シミュレーションの研究者と協議を重ねる中で、先進的な技術を用いた取り組みを知ることができたとともに、様々な主体と協働して新たな技術をプランニングに反映させることの難しさも痛感した。

講評｜都市計画研究室 准教授　村山顕人 先生

海外の専門家と協働、そこで求められるもの

品川スマートシティスタジオには、これまでの演習課題とは異なる２つの特徴がある。１つは、従来の都市計画・都市デザインと最近のグリーン・スマート技術を融合させた「都市システムデザイン」という新しい手法の適用を試みたこと。もう１つは、米国のジョージア工科大学、台湾ベースの都市デザイン・コンサルタント、国立環境研究所の専門家と協働で進めるプロジェクトの一部として位置付けたこと。学生たちは、学部の演習と異なるアプローチに戸惑いを感じながらも、自分たちの役割を見定め、有用な分析と提案をしてくれた。講評会でも指摘された大きな問題は、開発ポテンシャルの見極め。日本全体としては人口や経済の縮小が見込まれる中、品川では、リニア中央新幹線の開通や高輪ゲートウェイ駅の開業、羽田空港の機能強化により、さらなる開発への期待も小さくない。さらに、世界の成長都市の感覚を持つ（麻痺している？）海外の専門家との協働では、開発ポテンシャルを過大に見積もりがち。東京の学生には控えめなローカルな感覚を説明することが求められていたのであるが、海外の専門家の勢いに圧倒されてしまったか。

東池袋 – *Design Expression of Sustainability in the Landscape*

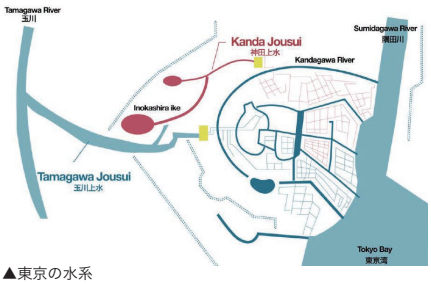
＜課題要旨＞
都市環境の持続性を高めていくことは近年強く意識されているものの、多くが細分化された敷地や街区レベルにとどまっており、本来より広域的な都市構造に働きかけなければならない。そのためには持続可能な環境形成に寄与すべき空間や物的要素が如何に機能しているか、明確に認識する必要がある。自然環境の基盤を形成する要素に溢れる東池袋において、その仕組みを可視化し、審美的かつ文化的な価値を付加することができるランドスケープデザイン表現を求める。

The Garden City - 人々の手入れによるグリーンインフラ構築の提案

寄稿：都市デザイン研究室 M1 應武

0. Background

神田上水をはじめとする水系で、江戸時代から東京は各地域が流域ごとに関係づけられていた。
また、近年は激甚化する災害、特に内水氾濫への対策が求められている。



▲東京の水系

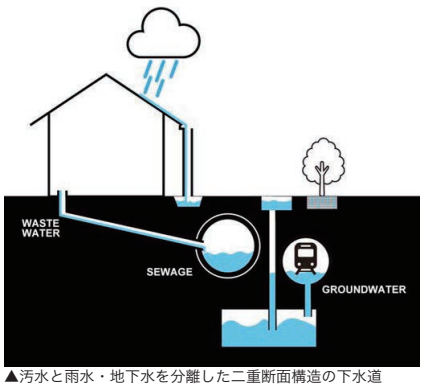
1. Concept

江戸は“庭園都市”と呼ばれた。水系が上下水道というインフラだけでなく、大名庭園や路上園芸などの娯楽いも活かされていた。これはまさにグリーンインフラそのものである。
グリーンインフラの維持管理のためには“手入れ”が欠かせない。個人の雨水利用がグリーンインフラの手入れとなる、すなわち、まち全体を個人の庭からなる大きな庭として捉え手入れしていく継続的な取り組み "Gardenizing" が必要だ。ここから、個人とまちの新たな関係性が生まれる。

▲庭園を楽しむ江戸の人々

2. Aim

現在地下鉄のトンネルからは大量の地下水が湧き出している。この水は下水道に排水されており、下水道の容量を削っている。
さらに、東京の下水道は雨水と汚水が合流している。これを分離し、冗長性のある雨水排水システムを構築する必要がある。

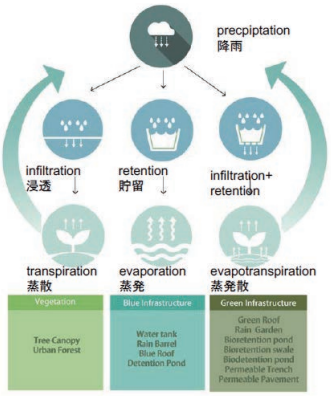


▲汚水と雨水・地下水を分離した二重断面構造の下水道

3. Theory

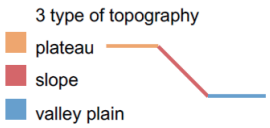
自然の中で雨水は降雨してから、浸透・貯留・蒸発散を繰り返しながら上流から下流へと流れている。この水系を都市にも３次元的に実装する。
また、現在の雨水管理は公共用地に降ったものに対してしか定められておらず、私有地に降ったものについては管理が曖昧である。私有地の雨水管理システムを構築することも目的である。
さらに、現在地下鉄のトンネルからは大量の地下水が湧き出している。この水は下水道に排水されており、下水道の容量を削っている。

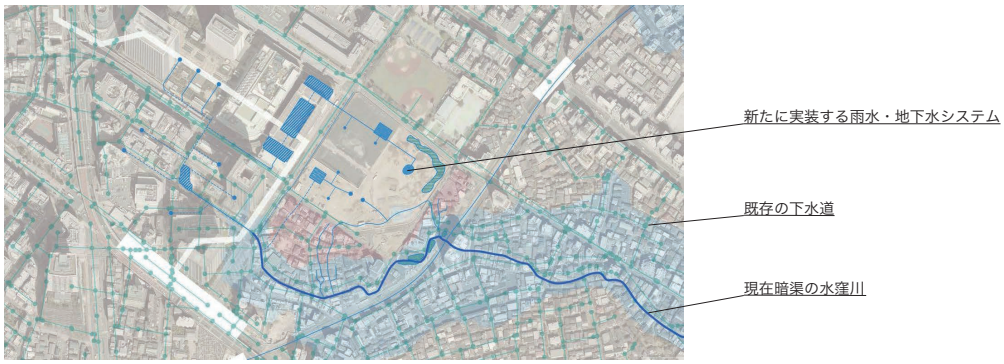
▲雨水は降った場所によって管理主体が異なり、私有地は管理主体が曖昧



▲雨水のダイナミズム

4. Site Analysis

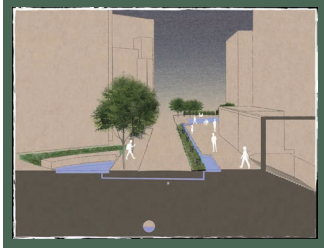




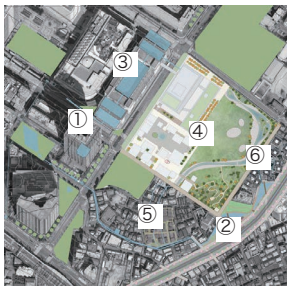
Design1：地下水利用と水窪川の可視化

暗渠化された水窪川を可視化し、水利用の軸とする。主な水源は地下水だが、雨水排水の役割も担う。

①湧水池の再生



②可視化された水窪川とトラム新駅の一体的デザイン

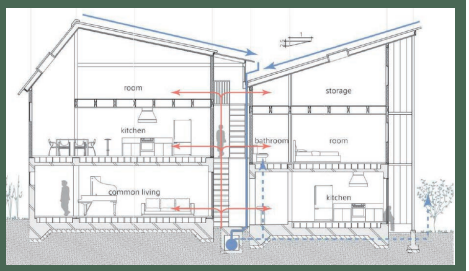


Design2：雨水利用

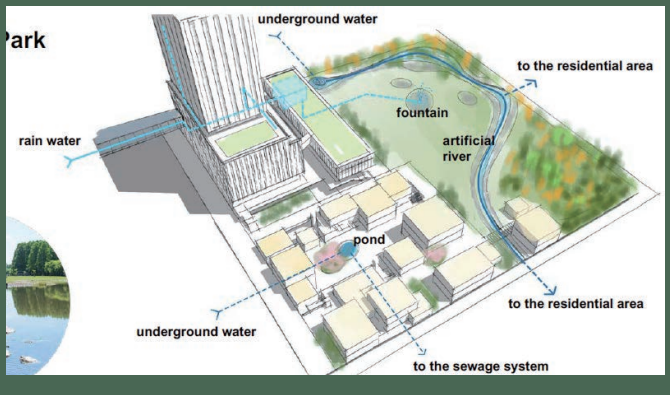
各敷地に雨水の集水・浸透・貯留・蒸発散のシステムを組み込み、新たな水系を実装する。さらに、水系の手入れをしながら雨水を利用する生活を描く。

③既存ビル群での集水・活用

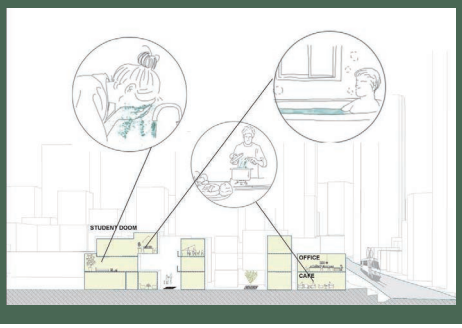
⑤雨水を集める建築

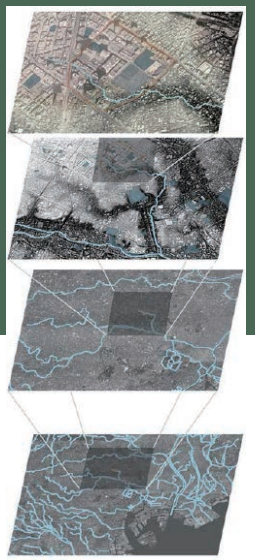


④防災公園での貯水・調整



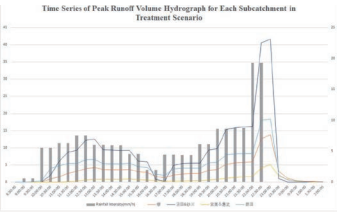
⑥住宅地での水のある生活





Feedback

グリーンインフラの実装により、どれだけ雨水の急激な流出が抑えられるかをシミュレートした。その結果、降雨強度を問わず、安定的に雨水流出を抑え、内水氾濫を防ぐことが示された。



◀雨水流出抑制評価

Future Development

この水システムは水窪川流域、神田川流域、東京圏全体で入れ子状のクラスターを形成する。水を利用し楽しむ、現代版“庭園都市”の誕生である。

▶上から、東池袋界隈・水窪川流域・神田川流域・東京圏のフラクタル上のクラスター

都市デザイン研究室 M1　應武遥香

分野を超えて得るもの

グリーンインフラというこれまで扱ったことのないテーマでの提案は非常に刺激的だった。手入れが個人をまちと関係づける新たなツールとなるという提案を形に落とし込んでいく際、雨水の状態管理やレインガーデンの整備方法などの新たな知識が求められた。また、建築や環境系のメンバーとの議論で自分のなんとなくの感覚に改めて論理性を求められた。自分はとかく個人の関心に閉じこもりがちだが、こうした新たなテーマで他分野の人と議論を交わす機会を大切にしたい。

都市計デザイン研究室 M1　沼田康佑

水の見せ方

今回のスタジオはグリーンインフラがテーマであったが、それと同時に非常に水の流れを考えさせるものだった。コンター、古地図、そして下水道台帳に至るまで様々な情報を駆使して、一見すると水の存在を感じさせない土地からその流れを見つけ出す作業は、難しくも学びの多いものだった。ただ個人的にはそうした分析を十分に設計に活かせなかったと反省している。次の機会があるかはわからないが、調査からデザインまでを全力で走り切るということは、目標としていきたい。

講評｜都市計画研究室 教授　宮城俊作 先生

"水のあり方"を再考し得る提案

いうまでもなく都市空間における水の存在は多義的です。近年の異常気象がもたらす様々な弊害が水を通じて現れていることに鑑みれば、おしなべて肯定的であったそれまでの位置づけに変化の兆しが見られることは想像に難くないでしょう。今年度の大学院スタジオの課題は、多様な評価の視線にさらされる水の存在を、トータルな都市環境の中にバランスよく統合していくための方途とそのデザイン表現を求めるものでした。特にこの提案において特筆すべきは、「環境水利権」と呼べる概念に空間的実体を与えようとしていることです。農業水利権の都市環境版ともいえるものであり、夏季の暑熱環境の緩和、景観的効果、親水性、生物多様性の保全再生、さらには防災や減災機能を期待するグリーンインフラまでを含む水の価値を享受できるしくみを想定し、統合的なシステムとネットワークの持続可能性を地域コミュニティにおいて担うことです。行政に委ねてきた従来の都市における水のありかたを再考する契機となることを期待したいところです。

一文字に込める新年の抱負

One Character Expressing New Year's Resolution.

text_MUNENO / M1

日本の伝統行事である書き初め。新しい年の抱負を、筆を握り背筋を伸ばしてしたためると、身が引き締まる思いがします。2020 年の始まりに、研究室の先生方と修士１年の学生に、新年の抱負を漢字１文字で表してもらいました。それぞれのどんな思いが込められているのか、想像しながらご覧ください。

宮城俊作 先生

中島直人 先生

永野真義 先生

Information

Hey listen, -ちょっと聞いて！

1.20 手賀沼、結束

手賀沼プロジェクトに関わる方々で新年会を開催しました。まちづくりは酒の席から。目指す方向の一致を確認するとともに、さらなる連携をここに誓いました。(M1 西野)

1.20-21 小高 PJ　住民ヒアリング

小高の復興の歩みを一冊の本にまとめるプロジェクトが立ち上がりました。まずはヒアリングを進めています。(M1 應武)

1.27-28 修士２年　修論審査

修士２年生が集大成である修士研究について発表しました。堂々と発表し、質問に対応する先輩方の姿を見て、来年度の発表に向けて身が引きしまる思いです。(M1 宗野)

富山本（仮）鋭意執筆中！

富山 PJ では３月の脱稿に向け、執筆を開始しています。２月中旬にはバンクーバーへの現地視察も予定しており、ますます忙しくなります。ご期待ください！ (M1 佐鳥)

寒い季節はプロジェクトの活動も少し控えめかと思いきや、冊子の編集や来年度に向けた企画などに追われ、いつも通り忙しそうです。

1月の Web マガジン

http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

1.9 富士吉田 PJ 道路拡幅事例調査

道路拡幅を契機に町並みの修景などのまちづくりを行った事例である、町田市小野路宿通りを調査しました。(M1 宗野)

1.24 三国 PJ 住民向け報告会にて発表！

年度末の完成を目指すまちなか回遊サイン計画の住民向け報告会にて発表しました。(M1 宗野)

2月の予定

3rd - 4th	修士１年　修士研究ジュリー
6th - 7th	小高 PJ　大阪・奈良視察
8th (Sat.)	ソトノバ・アワード公開審査
12th - 13th	学部４年　卒業研究審査
25th - 26th	小高 PJ　徳島視察
29th (Sat.)	小高 PJ 「100 年、小高を感じる会」
	手賀沼 PJ　生き物観察会

編集後記

都市工学という分野において普遍的な感覚が重視されることは言うまでもない。計画やデザインに蓋然性を持たせ、他者の共感を得る必要がある。だが一見奇怪な発想ながら妙に説得力のある人種というのは一定数存在する。その本質は何であろうか。緻密なロジックか。卓越した表現か。あるいは人の魅力か。

著名な建築家やランドスケープアーキテクトには他者を惹き、導く政治力のようなものが備わっていると感じる。私も人の力を磨かねば。(M1 西野)

■ マガジンへのご意見・ご感想をお寄せください

ご意見やご感想を投稿していただけるフォームを試験的に開設いたします。
QR コードまたは URL よりアクセスし、お気軽にご投稿ください。
URL：https://forms.gle/M33De1hfNReuMDxJ7